

新仏教徒のラジオ出演

——高嶋米峰を中心に——

坂本 慎一

日本では、大正一四年にラジオ放送が開始された。東京、大阪、名古屋の放送局は、翌年に統合されて日本放送協会となり、戦後の昭和二六年まで独占放送を行なった。テレビジョン放送は、戦後の昭和二八年以降である。

戦前の欧米では、音楽の放送が半分以上を占めていたのに対し、日本では教養放送が重視され、ラジオによって国の文化水準をあげる「ラジオの使命」が強調された。ラジオ受信契約者数は、昭和一二年には国内すべての新聞発行部数を追い抜き、戦後に民間放送が開始されるまで、日本放送協会は日本最強のマスメディアであった。

明治大正期の新仏教運動で中心的な役割をはたした高嶋米峰は、最初期からラジオ放送に出演していた。国家的な冠婚葬祭放送を何度も担当したり、年末の結びの放送を毎年のように行なったりするなど、日本放送協会から絶大な信頼を受けていた。高嶋の活躍のみならず、その影響を受けた友松圓諦や高神覚昇らの登場で、ラジオの教養放送は全盛期を迎える。友松と高神は、放送によって人気を集め、全日本真理運動を全国で展開した。

高嶋は、同じ明治八年生まれの下村宏と懇意にしていた。下村は、通信官僚出身で台湾行政のカリスマ的存在であり、朝日新聞副社長、大日本体育協会会長を歴任していた。彼らは、還

暦を迎えた昭和一〇年、乙亥会(明八会)を共同運営している。下村の後輩による再三の勧めもあり、昭和一三年八月高嶋は台湾へ講演旅行に行ったこともあった。

日本における放送は、それまで教養放送が主体だったのに対し、日中戦争が開始された昭和一二以降は報道が増加した。教養放送自体も、昭和一六年には、それまでの「講演者中心主義」を廃止し、「協会の企画に即した講演」を放送するようになる。さらに太平洋戦争開始以降は、「国家目的に帰一する」方針となり、放送によって国民の精神を統制する方向へ変化していった。

昭和一七年八月に、高嶋はインド向けの対外放送に二度出演した。この放送は対外プロパガンダの一環であったため、高嶋は戦争のプロパガンディストと解釈されることもあった。しかし、その講演筆記を詳しく読むと、基本的に「大東亜戦争」をアジア解放の戦争としながら、一見話が横に逸れたような部分に重要な主張を潜ませている。こうした巧妙な話術は、下村も得意としていた。

昭和一四年四月に放送した「国民性への反省」では、高嶋は戦時下の時勢を批判していた。太平洋戦争開始後は、子供向けの当たり障りのない放送を主に行なっており、積極的に戦争に与っていたとは言いがたい。昭和二〇年八月三十一日の「連合軍の進駐を迎えて」では、国民に対して終戦の徹底を呼びかけている。高嶋の態度がわずか数年で「反戦的↓好戦的↓反戦的」と二度変化したと解釈するのは無理があろう。

ラジオが戦意昂揚プロパガンダの道具と化した状況で、高嶋

は拙速に体制を打破しようとしたのではなく、高度なバランス感覚を保ちながら妥協し、状況打開の機会をうかがっていたと解釈すべきではないか。最悪の状況を受け入れた上で最善を尽くす戦略は、ゲーム論では「鞍点」と表現される。親友の下村は、軍部と巧みに妥協しながら、最後は終戦の玉音放送を実現し、終戦に貢献した。高嶋も同様に「鞍点」を維持して対インド放送に参加し、最後には終戦に貢献したと解釈すべきだ。当時、権力に対する微妙な位置を保ちながら、巧みに終戦の機会をうかがっていた人は、この二人以外にもいたかもしれない。戦時下の状況を少しでも受け入れた人を叱責するような歴史観では、こうした人物は評価されえないのである。

パネルの主旨とまとめ

大谷 栄一

報告者たちは、二〇〇七年より、共同研究プロジェクト・新佛教研究会(科研費基盤研究(B))「近代日本における知識人宗教運動の言説空間―『新佛教』の思想史・文化史的研究」、代表者・吉永進一を通じて、新仏教運動を中心とする近代日本仏教史に関する調査・研究を進めてきた。その成果は、過去三年間に実施したパネルを通じて公表してきた。本パネルは、これらの成果を踏まえた、最終報告というべき位置づけを持つ。今回は、近代東アジア世界と新仏教運動の関係をテーマとした。新仏教徒たちが帝国日本の戦争や植民地政策との関連の中

で、近代東アジア世界とどのように関わったのかをトランスナショナルな視点から検討することが、今回のパネルの目的である。

大谷は、さまざまな次元の相互作用に着目し、トランスナショナル・ヒストリ的な帝国史研究という視点から、新仏教研究ならびに近代仏教史を捉え直すことを提案した。高橋は、新仏教徒独自のアジアへの視線があるとはいえないが、雑誌『新佛教』が国内外、植民地内外、仏教界内外に生ずる緊張とバランスの上に言説を生成し得た仏教系メディアであることを明らかにした。新仏教徒の多様な戦争観を分析した守屋は、多くの論者が仏教に基づいた議論をあまりしない中、鈴木大拙と井上秀天の論説は仏教信仰に基づいた社会倫理を示した事例であると指摘した。坂本は、ラジオが戦意昂揚プロパガンダの道具と化した状況で、高嶋米峰は高度なバランス感覚を保ちながら、状況打開の機会をうかがっていたのではないかと解釈を提示した。

コメンテータの岩田文昭氏からは、今回のパネルではトランスナショナルな相互関係性が検討されたが、「戦争推進」対「戦争反対」、「抑圧」対「抵抗」のような従来の新仏教研究の持つ二項対立図式をどれだけ乗り越えることができたのか、という指摘が最初に投げかけられた。次に大谷報告に対して、中国の仏教雑誌に転載された新仏教徒の論文は戦争推進の論理に用いられ、超越的原理を提供できなかったのではないかと質問が寄せられた。それに対して大谷は、戦争批判の論文が転載されていないかを検討する必要があると答えた。高橋報告に